

副題 「笑顔の奥にあるもの」

尚綱学院高等学校 3年 太宰 悠 (ダサイ ユウ)

私には国籍があります。皆さんにも国籍があると思います。ですが、世界には、国籍を持たない人が約400万人存在していると言われていています。その一部が、水の上で暮らしている現実を、想像すらしたことなく、知りませんでした。

私は今年の春にカンボジアのスタディツアーに参加し、トンレサップ湖を訪れました。そこで目にした夕日は、一日の疲れを癒してくれるほど美しく、水の上では子どもたちが無邪気に遊び、笑顔を浮かべていました。船の中で非日常的な景色をみて、「のんびりとした暮らしをしているな」と感じました。

しかし、現地の人のお話を聞くうちに、そこに潜む深刻な社会問題に気づかされました。近年、トンレサップ湖では、水質悪化や水位の低下が深刻な問題となっており、その影響で漁業が難しくなり、多くの住民の生活がますます困難になっています。またトンレサップ湖には、仙台市の人口と同じぐらいの約100万人が暮らしています。その中には、ベトナム系の難民やカンボジア国内で生まれながらも国籍を持たない人たちがたくさんいます。彼らには国籍も住民票もないため、法律上は存在していない人として扱われています。

私はこれを知って彼らには未来を選ぶ自由がないのだと思い、心が痛みました。国籍がないことの重みは、普段私たちが意識することは少ないです。しかし、それがあからこそ医療や教育、社会保障といった基本的な権利が保障されるのです。彼らは、それらを受けることが出来ません。ただ生まれてきた場所が違うだけで、人間としての当然の権利が奪われてしまうのです。

こうした問題は、カンボジアだけでなく、世界中に存在しています。国の崩壊や親の無国籍による世代連鎖など、背景には複雑な要因があります。国連のSDGsには、「2030年までに、すべての人が法的な身分証明を持てるようにする」という明確な目標がありますが、実現にはまだまだ多くの壁があります。特にトンレサップ湖では、雨季と乾季で水位が大きく変わり、定住が困難です。さらにカンボジアでは国籍を持たない人は土地を所有できず、住民登録もできません。

これは、国家の経済力や行政の制度が未整備であることも背景にあります。経済成長が進んでいるとはいえ、十分な医療・福祉体制は整っていません。

ん。特に国籍を持たない人々に対しては、公的な支援が追いついていません。

私はこうした人々にこそ、住所が必要だと思います。

特に移動を強いられる水上生活者は、一軒ごとに正式な住所を割り当てるのが難しいため、対策法がないか私は悩みました。そこで、集落やコミュニティ単位で住所を与える制度が有効だとある大学のセミナーで知ることができました。実際に、バングラデシュの難民キャンプでは、個人単位での登録が困難な場合、家族単位での登録制度が導入されています。これは、国籍や正式な身分証を持たない人々にも最低限の支援が届くようにするための仕組みです。たとえ個人の詳しい情報が把握できなくても、家族ごとにコードを割り当てることで、支援を継続的に提供することができます。このように、国連機関やNGO団体が現地の政府と連携し、集落ごとに住む人々をまとめて登録することで、行政に認められる仕組みを作ることができます。

私たちは、法的な身分を持たない人々に焦点を当てるべきです。トンレサップ湖で見た笑顔の奥には、見えない苦しみがあることを知りました。私がこの問題に向き合っただけで感じたのは、「知ること」だけでは十分ではないということです。私たちには、彼らに何が出来るかを考える責任があります。私は将来、無国籍問題をはじめとする国際的な人権課題について知識を深めながら、フィールドワークや国際ボランティアにも積極的に参加し、実際に当事者の声を聞く機会を増やしていきます。

グローバル化が進む現代において、無国籍という問題は、すべての国に関係がある課題です。「われらは、全世界の国民が、ひとしく恐怖と欠乏から免かれ、平和のうちに生存する権利を有することを確認する。」これは、日本国憲法前文です。世界中の人々が、平和に生きる権利を保障される社会を目指しています。

近年の日本では自国民ファーストの風潮が強まっていますが、行き過ぎれば、支援を必要とする外国人や無国籍者が排除される恐れがあります。国際社会の一員として、他者の苦しみにも目を向け、共に生きる社会を築く責任が私たちにはあると考えます。